

## 〈修養〉を中心に読み解く夏目漱石「こころ」

佐々 優香

### はじめに

明治時代における「立身出世主義」の流行に伴い、立身出世のための方法論として修養が流行した。修養書ブームが起こり、社会現象ともなった修養は、大正期まで世間に大きな影響を与えた。夏目漱石「こころ」(大正三「一九一四」年四月二〇日から東京・大阪両『朝日新聞』に連載された。『東京朝日新聞』では八月一日まで、『大阪朝日新聞』では八月一七日まで掲載)は、そのような修養の時代に描かれた作品である。「こころ」において描かれる先生とKの学生時代は、日露戦争前後であり、まさに修養の時代であった。また、漱石も、自身の講演<sup>(注1)</sup>や、「こころ」本文において修養という言葉を用いていることから、修養に関心を持っていたと考えられる。

王成は、漱石文学が修養の時代の文学として読めることを指摘している。<sup>(注2)</sup>また、Kが修養を行っていた人物であるという指摘は、藤井淳が行っている。<sup>(注3)</sup>しかし、「こころ」における「先生」(本稿における「先生」は「こころ」の作中人物である「先生」を指すものであり、以降はかぎ括弧なしの先生と表記する)や「私」を修養の文脈から読み解く研究はなされていない。そこで論者は、明治時代に流行した修養に着目し、それが二人の人物造形や関係性にいかに関与しているのかという観点から「こころ」を読み解いていきたい。

具体的には本稿では、明治から大正期における一般的な修養と、「こころ」作品内における先生の〈修養〉の違いを明確にし、また、「私」が遺書を公開したのはなぜかを〈修養〉の観点とあわせて明らかにしたい。

「こころ」本文の引用は『漱石全集』第九卷（岩波書店、二〇一七年）による。漢字の旧字体は新字体に、特に読みにくいものについては論者によってふりがなを付している。

## 一 修養の時代

明治時代に流行した本とえば、福沢諭吉の『学問のすすめ』（明治五「一八七二」年二月初編刊行、明治六「一八七三」年一月から月刊形式で明治九「一八七六」年まで一七編刊行。その後明治一三「一八八〇」年、一冊の本に合本。発行者は福沢諭吉）がある。『学問のすすめ』では、学問を手段とした立身出世が謳われた。明治の青年たちは、立身出世し、社会で成功することを目標とするようになった。また、『学問のすすめ』と並んで明治のベストセラーとなった『西国立志編 原名 自助論』（明治三〜四「一八七〇〜七一」年）は、明治初期の啓蒙家である中村正直がイギリスのサミュエル・スマイルズの『自助論』（《Self-Help》）（一八五九「安政六」年刊行）を翻訳し、明治青年に立身出世のための修養案内書としたものである。修養とは、山田武太郎（美妙）編集の『新編漢語辞林』（明治三七「一九〇四」年二月初版）の中で、「スデニミニツイテ井ルノヲサメ、サラニ又ヤシナヒンダテル」と記されている。修養は、明治の青年たちに共有されていた「立身出世」と「立志」をめぐる基本的テーマであった。<sup>（注4）</sup>

明治後半に入ると、修養論は流行し、人生問題や精神問題を明治の知識人が盛んに探究するようになる。また、明治三六（一九〇三）年以降、藤村操の自殺事件<sup>（注5）</sup>をきっかけに修養に関する文章が雑誌に欠かせないものとなり、相次いで「修養欄」が設けられ、修養書も流行した。このことは、『太陽』（第十七卷第三号、一九一一年二月増刊号）の「明治四十三年一般出版会」に「所謂成功書類、修養書類も多く世に出て無暗と人に修養を強ひた」とあることからうかがえる。自殺した藤村操が象徴するように、明治後半からは煩悶論や厭世観が流行した。明治初期以来の「立身出

世主義」が、現実の閉塞化した社会では現実化しにくくなったため、そこに生じている青年層の不安に答える形で修養論が流行したのである。特に倫理問題に没していた当時の学生たちに向け、「努力による人格の修養」を第一義とする修養書が書かれ、流行することとなった。<sup>(注6)</sup>

修養は、明治初期から半ばまでは立身出世するための身の処し方、つまり方法を説くものだったが、それは次第に自己目的化していき、明治後期から大正期の半ばにかけて大正期特有の「人格」「教養」の観念に色揚げされた。<sup>(注7)</sup>『国史大辞典』(吉川弘文館、一九八七年)の「教養主義」の項(執筆者は古田光)によれば、教養主義という言葉は、大正期において、明治期までの修養という言葉に代えて用いられ始めた。修養においては、外面的、社会的な生活の様式(型)が規範として重んじられ、これを体得する訓練が重んじられた。それに対し教養は、新しい人間形成のあり方を意味する言葉として用いられだしたものである。ここでは、教養主義は、読書見聞によって人類の遺した豊富な文化的諸価値を受け入れることを通して、自我を内面的、個性的に発達させることを意味した。こうした意味での教養を追及しようとする、新しい思想傾向ないし生活態度が、のちに教養主義と呼ばれるようになったのである。

大正期の潮流に大きな影響を及ぼした「教養派」の筆頭は漱石門弟である阿部次郎である。阿部次郎が主張した教養主義の目的は、「人格」の完成であり、そのありかたが、大正期における一般的な「教養」の認識であったことが指摘されている。<sup>(注8)</sup>

本稿においては、立身出世のための修養は、かぎ括弧なしの修養と表記し、「人格」「教養」の観念に色揚げされた修養は、かぎ括弧付きの「修養」と表記する。先生独自のものは、山括弧付きの《修養》とするが、このことについては後述する。

## 二 師弟関係

## 二一 先生と「私」の関係

先生は、暑中休暇中の書生である「私」と鎌倉の海で出会い、交際するようになった。「私」が大学生になる頃には、「先生の学問や思想」について、非常な「敬意」（上・一一）をほらい、先生と「密接の関係」を築いていた。「私」は、まるで「世間に知られてゐない」先生の学問や思想が、世に知らしめられないことを惜しがったが、先生は「私のやうなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」、「世間に向つて働き掛ける資格のない男」だからしかたがないと言う。この頃の先生は、「私」に学問や思想を教えながら、先生自身の暗い過去はほめかす程度であつた。奥さんは「私」に、先生はなぜ「世の中へ出て仕事」をしないのか尋ねられると、「何か遣りたい」のところが、「それで出て来ない」から「氣の毒」だと先生を評した。また、先生の遺書においても、「外界の刺激」で「踊り上がり」、社会へ「切つて出やう」と思い立つや否や、「恐ろしい力」が「御前は何をする資格もない男だ」と先生をおさえつけ、動けなくなったことが告白される（下・五五）。先生は、社会と関わりたい気持ちを持ちながら、過去のために社会と関わることなく暮らしているのである。

また、ここで「私」がどのような人物か確認しておきたい。「私」は、「世間が先生を知らないで平氣であるのが残念」（上・一一）だつた一方で、世間に知られることなく「只独りを守つて多くを語らない」先生のことを「偉く見えた」（上・一四）。「私」は、立派な思想を持ちながら、俗的な現実から離れた孤高の「思想家」として、ある種理想化した先生に惹かれているのである。その「私」の考えは、「役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いてゐる」（中・六）と考える「私」の父や、「先生々と私が尊敬する以上、其人は必ず著名の士でなくてはならない」（中・一五）と断言する「私」の兄とは対照的なものである。そして「私」自身、卒業後に中学の教師の口がまわってくる

も断り、特に職を探そうとしない姿からは、世間的な地位を求めない姿勢がうかがえる。そのような「私」が職に  
 かず世間的な地位を持たない先生のもとに通い、学問や思想を学ぶことは、どのように捉えられるだろうか。戸松泉は、  
 明治後期は「高等教育を受けた者即ち大学・高等専門学校卒業者の無就業者が増加しいわゆる〈高等遊民〉問題が盛  
 んに取り沙汰され」ており、「大学卒業当時の「私」は時代の風潮に安易に染まり、〈高等遊民〉を気取っていた青年  
 であった」と指摘している。<sup>(注9)</sup> 確かに家の財産で働かず生活することもでき(中・一五)、職を求めようともせず、思  
 想に背景を持つでもない(下・二)「私」は、〈高等遊民〉に感化され、社会に出ることなく生活している先生に興味  
 を惹かれていると捉えられる。

さて、社会との関わりに未練の残る先生と、社会的地位に興味を示さない「私」は、一見相容れないに見えるが、  
 実際には非常に親密な関係を築くこととなった。地位に興味のない「私」にとつて、孤高の「思想家」である先生は、  
 むしろ好ましい理想的な人物であったのだ。鎌倉で出会い、先生に対し「若い血」が「素直に働いた」「私」は、東  
 京でも先生を訪ねるようになる(上・四)。出会ってすぐに「懇意になつた積でゐた」「私」に対し、先生は「素気な  
 い挨拶や冷淡に見える動作」が多く、「私」はよく「失望させられた」。しかし、足繁く先生のもとへ通ううち、「先生  
 の学問や思想」について、「密接の関係」を築くまでになる。先生の思想に「非常な敬意」を払う「私」は、「思想家」  
 として「纏め上げた主義の裏」に、「自分自身が痛切に味はつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりする程の事実」  
 (上・一五)が畳み込まれていると考える。そんなある日、「私」は父の病気のため国へ帰ることとなった。帰郷した  
 際に「私」は父と先生とを比較し、「父が私の本当の父であり、先生は(中略)あかの他人」であるという事実を、「始  
 めて大きな真理でも発見したかの如くに驚ろいた」(上・二三)。その時の「私」には、「血のなかに先生の命が流れて  
 る」と感じられるほど、先生に近しさを覚えていたのである。はじめは、〈高等遊民〉としての先生に興味を抱いて

いた「私」だが、先生の学問や思想に触れるうち、先生個人への興味と、血の繋がりを感ずるほどの自己同一感を抱くようになるのである。

一方、先生は「私」をどのように捉えていたのだろうか。「私」が先生のもとへ通うようになったある日、先生は「何でさう度々私のやうなもの宅へ遣つて来るのですか」（上・七）と自分を卑下するような物言いで「私」に尋ねる。また先生は、「私」が「淋しい」からやって来るのではないかと言った上で、「其淋しさを根元から引き抜いて上げる丈の力がない」と述べており、「私」に慕われるべき人間ではないと考えているようである。先生と「私」が思想や学問について「密接の關係」を築くようになってからも、先生の考えは変わらなかつた。上野へ出掛けた際に先生は、「恋に上る階段」の「異性と抱き合ふ順序として、まづ同性の私の所へ動いて来たのです」（上・一三）と「私」の行動を断じる。先生が「恋」と定位した「私」のあり方については後述する。一途に先生を慕う「私」を、先生は「御氣の毒」（上・一四）に思ふばかりであつた。Kが自死するまでの一連の事件を通し、自分が叔父と同じように利己的な人間だと愛想を尽かしてしまつた先生には、そんな自分が慕われることは心苦しく、「御氣の毒」に思うことなのである。ここで注目したいのは、学問や思想について「密接の關係」を築いた頃、先生に傾倒し、先生の血が流れていると感じるほど自己同一感を覚えていた「私」に対し、先生は慕われることが心苦しく、「御氣の毒」に思うという二人の温度差である。しかし、先生は遺書において、「私」のように「血」という言葉を用い、自己同一化を図るかのような表現を行う。そこで、二人の温度差を縮めた出来事を確認したい。

「思想上の問題」について、「大いなる利益」（上・三一）を先生から受けていた「私」だが、先生が過去を明かさないために「利益を受けやうとしても、受けられない事」がままあつた。ある時「私」は、「はつきり云つて呉れないのは困ります」と先生に「打ち明けた」。それに対し先生は、思想と過去を混同しているのではないかと返答し、「私の

過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それは又別問題」になると言う。「私」は、過去と思想は別問題ではなく、「先生の過去が生み出した思想だから（中略）重きを置く」のだと、先生の過去を明らかにするよう迫った。

「たゞ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

（中略）

「あなたは本当に真面目なんですか（中略）。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から真面目ですか」

「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です」

私の声は震へた。

「よろしい」と先生が云つた。

（上・三二）

「私」が「真面目」かを幾度も尋ねたうえで先生は、「適當の時期」（上・三一）が来た時に、過去を告白するとした。Kの死後、社会と隔絶し生きてきた先生が、初めて他者に対し過去を語ることを決意したのである。人間全体を疑っている先生だが、自身の思想と学問に深い敬意を示し、先生の過去を前提とした思想にこそ価値があるという「私」の強い後押しを受け、先生は自らの過去と思想に価値を見出し得る可能性を感じたのではないだろうか。これまで過去と、思想・学問とを分けて考えており、思想・学問のみを「私」に教授していた先生だが、「私」の熱烈な希望を受け、過

去をも与えることを決意したのである。

「私」の「真面目」さをはかる問答の末、先生は「私」が本当に「真面目」であることを認め、過去の告白を決意した。そのことは、遺書に「たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。」(下・二)と書いてあることからわかる。その直後には、先生の過去を見せるように迫つた出来事について、「私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとした」と表現したうえで、「私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」と語っている。ここで先生は「私」と同様に「血」という言葉を用い、自己同一化を図るような表現を行つている。「私」の「真面目」さが先生の心を動かし、「血」という表現を用いさせ、過去の共有により自己同一化を図るほど近い存在となつたのである。

## 二二 漱石と弟子の関係

先生と「私」の関係について考えるにあつて、漱石と弟子の関係について確認したい。以下は、椎名健斗の整理を参考にして<sup>(注10)</sup>いる。現在「漱石山脈」の構成員とみなされている門弟らには、漱石がまだ五高教授ないし東大講師であつたとき、いわば「知識人」漱石に惹かれて門下生となつた者たち(Ⅱ第一世代)と、それより後の「作家」漱石に惹かれて門下生となつた者たち(Ⅱ第二世代)がいる。

第一世代の弟子の代表としては、小宮豊隆、森田草平、阿部次郎などが挙げられる。小宮は、漱石と「第一世代」の門弟との間に芽生えた関係性を、ある種の「愛情」や「恋」という表現を用いて表している。<sup>(注11)</sup>この世代は漱石とパーソナルに結びつき、師からの承認そのものを自己目的化する濃密な師弟関係を築いていた。

「第一世代」より五年から十年遅れた「第二世代」には、内田百閒、芥川龍之介、久米正雄などがある。彼らにとつての漱石は、すでに「文豪」といった象徴的な存在であり、「第一世代」ほどパーソナルで濃密な関係は築かなかつた。また、漱石からの承認そのものは目的ではなく、漱石からの承認に付随する文壇からの承認が目的であつた。「第二世代」の門弟たちは、漱石を「優れた作家」（どのように優れているのか、具体的にはあえて言及しない）という象徴的な存在の範囲内に封じ込めることで、漱石との師弟関係と自らの作家的個性を両立させる戦略をとつたとみられている。

先生と「私」の関係を、漱石と門弟たちの関係に当てはめて考えれば、「私」が学ぶことは学問や思想から先生の過去にまで及び、かつ「私」から先生に対する愛情は激烈であり、「第一世代」のようにパーソナルで濃密な関係であつたとと言える。

ここで、先生は「私」が自身を慕うことについて「恋」と定位していたことを思い起こしたい。漱石の第一世代の弟子たちが師弟関係について「恋」という言葉を用いて表現していたことを踏まえれば、先生と「私」の關係に「恋」という言葉を用いたことは、パーソナルで濃密な一種の師弟關係を表現していたと捉えられるのである。

### 三 「私」による遺書公開の意味——《修養》の観点から——

先生に対する愛情が甚だしく、密接な關係を築いていた「私」だが、先生の想定した遺書の繼承のあり方とは異なり、世間はその遺書を公開する。なぜ「私」は、対象を限定せず、世間全体へと遺書を公開するに至つたのか。遺書公開には先生と「私」にどのような効果があるのか、先生と「私」の《修養》とあわせて考えたい。

## 三十一 先生における効果

先生の遺書には、先生の過去を「私」だけに託すというメッセージと、「私」よりも先に開くという二律背反のメッセージが存在している。「何千万とある日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたい」（下・二）と記している一方、自身の遺書を、「貴方にとつても、外の人にとつても（中略）善悪ともに他の参考（ひと）に供する」とも言う。この二律背反のメッセージは、先生の生き方に通じるものがある。先生はKをなくした一連の事件のために、「私」から非常な敬意を払われるような「学問や思想」を持ちながら、「世間に向かつて働き掛ける資格のない男」だと自らを定直し、社会に出ることなく過（と）ごしている。その一方で先生は、前述したように社会と関わりたい気持ち強く持つ人物であった。「世間に向かつて働き掛ける資格のない男」だという自己認識と社会と関わりたいという思いが併存する二律背反のありかたが、遺書にも表れているかのようなのである。では、社会と関わりたいながらにその気持ちを抑え、自閉した生活を送っている先生が、社会との関わりを絶っているでもない「私」——言い換えれば社会と先生を繋ぐ媒介になり得る存在に、なぜその遺書を託すのか。このことは、「修養」と自己同一化の二点から考えることができる。

## ① 「修養」の資格と過去の譲渡

ここで再度、修養について確認しておきたい。明治時代に流行した修養は、立身出世を目的とした、学問を主な手段としたものである。そして修養は、明治時代後期から大正期半ばにかけて、「人格」「教養」の觀念に色揚げされ、読書見聞といった文化的諸価値の享受による「人格」の完成を目的とする「修養」へと変化していった。

先生とKが上京したばかりの頃を、先生は「我々は真面目でした。我々は實際偉くなる積であつたのです」（下・一九）と書き記している他、学生時代の二人の話題は「書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話位で持ち

切つてゐた」(下・二九)という。この言葉からは、これから世間で成功し、偉くなるのだという心意気が感じられる。つまり、学生時代における先生は、世間一般の明治青年並みに、立身出世したいという気概を持っていた人物であると言える。

しかしKの死後、先生が、自ら社会へ出る資格を剥奪し、世捨て人のような生活を送っている以上、立身出世を目的とする修養を行っていないことは明らかである。次に、読書見聞といった文化的諸価値の享受を通し、「人格」の完成を目的とする「修養」については、Kが自死するまでの一連の事件を通し、利己主義的である「あの叔父と同じ人間だ」と「自分にも愛想を尽かして動けなくなつた」(下・五二)と語っていることから、「人格」の「修養」ができる存在だと自らを定位していないようである。先生の遺書においても、「外界の刺激」で「踊り上がり」、社会へ「切つて出やう」と思い立つや否や、「恐ろしい力」が「御前は何をする資格もない男だ」と先生をおさえつけ、動けなくなつたことが告白される(下・五五)。先生は、立身出世まではもはや望まないとはいえ、社会と関わりたい気持ちを持ちながら、過去のために社会と関わることなく暮らしていた。つまり、先生は立身出世のための修養も、人格の完成を目指す「修養」も行ふ資格のない存在として自らを定位していたのである。

しかし、「私」が現れたことにより、先生は遺書を書き、「私」にそれを託すこととなつた。「私」に遺書を託すまでに関係が深くなつた出来事は、前述した先生の過去をめぐる「真面目」さを測る問答である。そして、この「真面目」さを測る問答こそが、「私」に「修養」を行ふ資格があるかを試す試験であつた。「真面目」であることを先生に認められた「私」に、先生は自叙伝とも言える遺書を託す。「私」は先生の人生から「真面目」に教訓を受けるといふ、「人格」「教養」に色揚げされた「修養」を行ふのである。「修養」の「教材」になるような過去を持ちながら「修養」を行ふ資格がないと自らを定位している先生は、「私」に「修養」の資格を認め、教訓となる自らの過去を譲渡するのである。

## ② 先生から「私」への自己同一化

先生の遺書において、しばしば「血」や「命」といった言葉を伴った表現がなされており、先生と「私」の自己同一化は著しいと言える。

私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。

(下・二)

ここで、先生が「新らしい命」という言葉を用いていることに注目したい。高等学校に入学する前に父母を失くし、親代わりに育てられた叔父に裏切られた先生の、家族や血縁者に関する思い入れの複雑さや深さは想像に難くない。また、Kを失くした一連の事件をきっかけに、「恋は罪悪」(上・一三)だと認識するようになった先生には子どもがない。子どもがない理由を「天罰だから」(上・八)という先生の言葉はあまりにも重い。先生に子どもはいないが、生まれてくるとしたらそれは、罪悪の恋から生まれた罪の子ということになる。このような背景を踏まえた上で、「新らしい命」という言葉について考えれば、これは子どももの比喩であり、「私」を自分の子どものように捉え、過去の罪悪を含めた自らの「遺伝子」を託そうとしているのだと言える。先生にとって「私」は、学問や思想を教える弟子であり、過去の罪悪を含む先生の遺書という「遺伝子」を与える子どもなのである。このように先生と「私」は、血縁関係にも似た濃密な師弟関係を築いており、先生から「私」への自己同一化は甚だしいと言える。

さて、ここで「修養」の資格の問題に立ち返りたい。前述したように、「修養」の資格を持たない先生は、資格を有

する「私」に自身の過去を「教材」のように供することを決意する。そして同時に「私」に自己同一化していた先生は、「私」の「修養」の資格をも共有する。そのために先生は、本来であれば誰にも告白したくない過去の罪悪までを「他の参考」に供する」という「修養」を行うことができるのである。そして、「私」が先生の遺書を読み、そこから教訓を得るといふ「修養」もまた、自己同一化した先生にとつても一種の「修養」となるのである。

これらのことを踏まえた上で、先生の遺書における「私」だけに託すというメッセージと、「私」よりも先、他者の者に開くという二律背反のメッセージについて考えたい。前述したように「私」と自己同一化した先生は、「修養」の資格をも共有する。それにより先生は、「私」に「教材」として遺書を託すという行動をとることができた。つまり、遺書を「私」だけに託すというのは、先生から「私」に行う「修養」であると言える。あくまでその資格の共有は「私」に対する自己同一感から得られたものであり、先生の過去の告白という「修養」は、「私」にしか開くことはなかった。すなわち、先生が行う過去の告白は、「私」に限るものであった。先生の「修養」は、相手が「真面目」すなわち「修養」の資格があり、かつ自己同一化し資格を共有する必要がある、一対一かつ一回的なものである。では、「私」よりも先に開くというメッセージは、どのように捉えることができるだろうか。

これは先生の学問や思想、そして過去を与えられ、先生の「遺伝子」を受け継ぎ、「新しい命」を宿した「私」にしか行えないことである。すなわち先生は「私」に、先生と「私」のように、パーソナルかつ濃密な血縁関係すら彷彿とさせるような師弟関係を築いた相手に対し、同じように「真面目」さを測り先生の遺書を託すという、先生の遺書を「遺伝子」や「血」に見立て、継承するという生家直系のごときあり方を求めたのである。従って、先生自身が行いたかったのは「私」にのみ遺書を託すことであり、これが先生の遺書における「私」だけに過去の告白を限るといふメッセージである。それを受け継ぎ「新しい命」を宿した「私」が次の人に先生と同じように一対一かつ一回

的な継承により「他の参考に供する」ということが、「私」より先に開くというメッセージとなるのである。

このように、先生の手から離れ、「私」によつて次の相手に遺書が託されるようなあり方を望んだ先生は、「私」を媒介に限定的に遺書を継承することで、間接的に他者と関わろうとしたのである。そして、先生と「私」のみの「修養」から離れ、更に先へ継承されていくあり方は、個人の「修養」を超えた、生家直系のように繋がっていく先生独自の〈修養〉となるのである。この点において、「私」は自身の「修養」としてのみ捉えていただろうが、意図せず先生の〈修養〉の一翼を担うこととなる。

また、ここで注意しておきたいのは、先生をはじめ、「私」に直接会つて過去の告白を行おうと考えていたことである。しかし、「私」の父は危篤状態であり、「私」がいつ東京に戻つて来るかは分からない。そして、明治天皇の崩御に続いた乃木希典の殉死を受け、「明治の精神に殉死」(下・五六)することを決意した先生には、「私」の上京を待つてゐる時間がなかった。そこで先生は、「己<sup>やむ</sup>を得ず、口で云ふべき所を、筆で申し上げる事」(中・一七)にした。そうして書いた遺書の最後には、次のようにある。

始めは貴方に会つて話をする気でゐたのですが、書いて見ると、却つて其方が自分<sup>はつきり</sup>を判然描き出す事が出来たやうな心持がして嬉しいのです。(中略)私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、徒勞ではなからうと思ひます。

(下・五六)

このように、先生は自身の生涯を「私」に口述するよりも、遺書として書き遺したことに満足を感じている。口頭で何かを伝える場合、基本的にそれは一対一で行われる。それに対し手紙として書き遺した場合、二次的にどこかに伝わる可能性が高まる。このことを、前述した「修養」、〈修養〉と合わせて考えたい。先生がもともと行おうとしていたのは「私」と先生の「一対一」かつ口頭で行う「修養」である。そのため、先生の手紙には「私」だけに過去を告白するというメッセージが存在する。しかし、遺書として書き遺す時、それは口述よりも確かな形として、先生の「遺伝子」となる。そしてその遺書が生家直系のごとく受け継がれるあり方が、〈修養〉であり、「私」より先に開くというメッセージになる。先生の二つのメッセージは、「私」だけに口頭で行うはずであった告白を手紙として遺した結果、「私」より先に開く可能性を色濃く孕んだために併存する結果となったのである。

また、乃木の殉死が先生の自死の決意を促したということにも留意しなければならない。乃木が自殺した二、三日後に自殺をする決心をした先生だが、「私」に宛てた遺書のはじめには、「私」に自身の過去を「明白に物語る自由を得た」（中・一七）と記している。しかし、「其自由はあなたの上京を待つてあるうちには又失はれて仕舞ふ世間的の自由を過ぎず、それを「利用出来る時に利用しなければ、私の過去を（中略）教へて上げる機会を永久に逸する」（中・一七）と言う。「世間的の自由」という言葉からも、先生は世間の出来事が理由で「私」に過去を物語る自由ができたのだと分かる。その世間の出来事とは乃木の殉死のことであり、乃木の殉死が世間の中で大きな話題であるうちでなければ、先生は過去の告白に乃木の殉死を「利用」できないという。先生は、乃木の殉死をきつかけとし、「明治の精神に殉死」するという乃木の行為を彷彿とさせる言葉を用いることにより、そのように意味のあるものとして自らの死を位置付けようとしたのである。

では実際に先生は、どのように乃木の殉死を「利用」したのか。軍人である乃木の遺書には「西南戦争の時敵に旗

を奪られて以来、申し訳のために死なう〜」（下・五六）と思つていたという内容のことが記されている。乃木は「西南戦争の時敵に旗を奪られ」た自身の過失を許せず、自罰として自殺するのである。先生は、乃木の殉死を知り自殺を決意したことから、乃木の殉死に感化された部分があると考えられる。乃木の殉死はどのように先生の自殺に繋がつていくのか。

先生は、叔父に財産を横領され欺かれた時には「世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念」があつたが、「それがKのために美事に破壊」され、「自分もあの叔父と同じ人間」（下・五二）だと意識するようになる。つまり、人間不信に陥るような経験をした先生は、Kが自死する一連の事件を通し、その不信の対象である利己的な人間に自らがなつてしまつたというのである。そして、「倫理的に潔癖」（上・三二）である先生は、自らの利己心を許すことができずにいる。このことを踏まえ、先生が乃木の殉死に何を見出したのか考えていく。先生がそこから感じ取つたのは、個人の過失を自分自身が許せず、そのために自罰するというあり方であろう。自分だけは立派な人間だという信念に反してしまつた自身を許せず、自罰として社会に出る資格を自ら剥奪し、立身出世のための修養も人格の向上を目指す「修養」も行うことができず、希死念慮に駆られ続けている先生は、乃木の自罰としての自死に共感を覚えたと考えられる。

以上のことから、乃木と先生の死には同様に個人の過失を許せず自罰するあり方が見出せることがわかつた。ここで注目したいのは、乃木の殉死は先生の死にどのように関連付けられたかである。先生は、明治天皇の崩御を取り上げ、「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは畢竟時勢遅れだ」と「烈しく」（下・五五）感じた。また、「明治の精神に殉死する」という妻へ言つた言葉に、「新しい意義を盛り得た」（下・五六）ような心持ちがしたという。そして、それから約一か月後の乃木大将殉死をきっかけに、自殺をする決心をしたと書いている。ここで先生は、

「明治の精神に殉死する」という言葉を遺書に用いることによって乃木の殉死を彷彿させるものとし、自身の死を意義あるものとして位置付けようとしている。

また、軍人である乃木の殉死は新聞によって大々的に報道され、社会に共有されるものとなったが、職についておらず世間に認知されていない先生の死は、遺書を書いたところで黙殺されてしまう可能性がある。そこで先生は、「明治の精神」という時代を超え普遍的な力を持つ言葉や、「殉死」という乃木の行為を彷彿とさせるような言葉を用いることで、語るに値しなと思われる先生のような個人を、語り得る存在にしようと試みたのである。これらの言葉を用いることは、「私」がこの先の時代へ継承する〈修養〉においても、語る価値のあるものとして先生の遺書を意味づけ、後世に語り継がれるよう意図したものだと考えられる。

このように先生は自身の死をもって生涯を意味づけ「私」に〈修養〉するべきものとして、生涯と思想を書いた遺書を託したのである。

しかし、「私」の手記は、先生の想定した遺書の限定的継承とは異なり、世間一般への公開を前提としたものである。このことは、「私」の手記の冒頭にて、本名を使わず「先生」と表記することについて、「世間を憚る遠慮」ではないと書いてあることからうかがえる。このことについて田中実は何らかのあたりで公開を意識して書き始められている」と指摘し、「不特定」の「開かれた」読者に向けて書かれた手記であると述べている。<sup>(注12)</sup> 論者としても、手記は世間への公開を前提としたものであると考える。ではなぜ「私」は、世間へ遺書を公開するのか。

### 三―二 「私」における効果

書生時代の「私」は、先生の思想を社会に公開したいという思いを持つ一方で、先生が世間に知られない「思想家」

であることに魅かれていた。このような「私」のあり方は、「真面目に人生から教訓を受けたい」と思う人へのみ遺書を継承したいと考える先生のあり方に通じるものがある。だからこそ、先生は「私」に遺書を託したのであろう。「私」は、先生を孤高の「思想家」たらしめたい一方で、先生の思想を社会に公開したいという矛盾した願望を持つ人物なのである。「私」による遺書公開は、先生の思想を世間に知らしめるという、「私」の一つの願望を叶えるものである。

その一方で、遺書を世間に公開することは、先生を孤高の「思想家」たらしめたいという願望の逆を行くものである。また、先生の生涯が、必ずしも手放しで世間から賞賛されるとは限らないことは、「私」も承知していただろう。「私」が先生の遺書を世間に公開することは、先生に対しても、かつての「私」に対しても、先生の絶対視を揺さぶる行為となる。「私」は、なぜ遺書公開に踏み切ったのだろうか。

基本的に「私」の手記において、先生は全面的に肯定され描かれている。先行研究において、先生と「私」のある種同化したかのようなありかたは既に指摘されている。<sup>(注1)</sup>確かに、「私」の先生に対する愛情は熱烈であり、先生と「私」の結びつきが密接であることは間違いない。しかし、「私」の手記は、先生との出会いを回想するものであるが、その冒頭にて、「其時私はまだ若々しい書生であつた」(上・一)ことが記されている。つまり、手記を書いている「私」は、既に「若々しい書生」であつた時代を終えており、手記にて回想された「私」の大学卒業時から、一定の時間が過ぎているのである。ここで、「私」の手記中の、先生に対する評価に着眼したい。「年の若い私は稍<sup>やや</sup>ともすると一図になり易」(上・一四)く、世間に知られぬ「思想家」である先生を非常に尊敬していた。そのことについて先生に、当時の「私」の状態を「あんまり逆上<sup>のぼ</sup>せちや不可<sup>いけ</sup>ません」、「あなたは熱に浮かされてゐる」と注意されたが、「覚めた結果として左右<sup>そ</sup>思ふんです」と答へた時の私には充分の自信があつた」という(同)。ここで注目したいのは、「年の若い私」というように、ことさら「私」が若かつたことが強調されている点や、「答へた時の私」のように、あくまでその当時

の「私」の考えとして、先生に熱をあげていたことが強調されている点である。このことを踏まえれば、現在の「私」は、先生を盲信していた頃から比較すると、一定の距離をもって先生や当時の「私」を見ていることがわかる。先生を孤高の「思想家」として理想化し盲信していた「私」のあり方があくまで当時の「年の若い私」であったと強調されていることを踏まえると、先生と現在の「私」には一定の距離があり、先行研究において指摘されてきた、先生と「私」の同化してしまった姿より、一定の時間を置き、冷静に当時の先生や自分を見ることができるようになった「私」の姿が浮かび上がってくる。先生と同化するかのように、学問や思想を学び、先生の思想を世間に知らしめたい一方、それを閉ざしていたいという矛盾した願望をも同じく持っていた「私」が、それほどに近しかった先生から距離をとり、自己を確立しようとしたのである。「私」が先生を肯定する気持ちや、尊敬の念は変わらないが、「私」が世間へ遺書を公開することは、先生、そして当時の「私」における先生の絶対視を揺さぶり、著しく自己同一化していた先生から一定の距離を置き、自己を確立しようとする試みなのではないか。

そしてその変化は、漱石門弟「第一世代」のパーソナルで濃密な関係から、「第二世代」の、師と一定の距離を置き、作家としての自己の確立をはかるそれに通じる部分があるのではないだろうか。前述したように、第一世代は漱石とパーソナルに結びつき、師からの承認そのものを自己目的化する濃密な師弟関係を築いていた。それに対し「第二世代」は、「第一世代」ほどパーソナルで濃密な関係は築かなかった。また、漱石からの承認そのものは目的ではなく、師弟関係でありながらも別個の存在として距離を置き、漱石との師弟関係と自らの作家的個性を両立させようとしていた。「私」は、第一世代のようなパーソナルで濃密な自己同一化した師弟関係から、第二世代のように師と一定の距離を置き、自己を確立しようと試みるようになったのである。

最後に、改めて先生と「私」の自己同一化がいかに描かれているか、そして、「私」の手記公開がどのように「私」

の自己の確立に関わるのかを考察していきたい。

#### 四 自己同一化する先生と「私」

##### ① 精神的な血の繋がりに

先生の遺書と「私」の手記において、しばしば「血」や「命」といった言葉を伴った表現がなされており、先生と「私」が自己同一化しているような印象を受けることは先に指摘した。先生と学問や思想について密接な関係を築いていた「私」にとって、「血のなかに先生の命が流れてゐる」と言つても「其時の私には少しも誇張でない」ように思われた(上・二三)と語られる他、先生は、遺書にて「自分の心臓」を破つて、その「血」を「私」に「浴せかけ」、「私」の胸に「新しい命」が宿れば「満足」である(下・二二)と記している。実際に二人の間に血の繋がりがあられるわけではないが、先生は「私」に対し、その「血」や「命」を与えようとしており、「私」も、自らの「血」のうちに先生の「命」を感じるほど、先生を自己同一化した近いものとして感じているのである。

このような二人の関係について、三浦泰生は「魂の親子」<sup>(注14)</sup>、瀬沼茂樹は「精神的親子」<sup>(注15)</sup>、相原和邦は「精神的類似が先生と「私」との間に見られる」<sup>(注16)</sup>、梶木剛は「精神的な血族」<sup>(注17)</sup>、小森陽一は「身体的合一感」<sup>(注18)</sup>と評している。

##### ② 叙述の類似

書生であった「私」も先生も、一人称は(私)であったことや、その文体もまた似ており、二人が融合しているような印象を受けることは、既に指摘されている。<sup>(注19)</sup> また、先生は自己の物語を受け入れてくれる読者として、青年の「私」のような自己同一的な選ばれた読者をしか想定しておらず、実際に「私」の手記は、先生の同伴者的な視点により、先

生の遺書まで案内したものであることも指摘されている通りである。「私」は、手記において先生を肯定的に描き、先生の遺書へ繋げる構造をとっている。また、先生の遺書を最後に置き、先生の自殺に対する「私」の考えなどは描かれない。先生の遺書を主役のように最後に置き、姿を消す「私」からは、先生への敬意が感じられる。

以上に見てきたように、先生と「私」は非常に近い存在であったと考えられる。しかし、ここで更に考えたいのは「私」は本当に一貫して先生に自己同一化しきった存在だったと言えるかという点である。「私」の手記が、先生の死後、「私」が「年若い書生」ではなくなった頃に書かれたものであること、先生と自己同一化したようなあり方が、あくまで当時の「私」のものとして限定・強調されていたことを思い起こしたい。当時の「私」の、先生への愛情や、密接な関係、そして自己同一化したあり方は本物だったであろう。しかし、時が過ぎ、当時の出来事を、少し距離を置いて見つめることができるようになった「私」には、変化があったのではないか。

非常な敬意を払い、密接な関係を築き、「血のなかに先生の命が流れてゐる」と感じるほど近い存在であった先生を突然失った「私」の衝撃と悲嘆は想像に難くない。先生の死後の「私」については描かれないものの、自分の心を大きく占めていた親しい人の喪失感から、不安定な状態に陥ったと考えられる。先生との自己同一化が甚だしかったほど、その影響も大きかっただろう。そのような状態から立ち直るための手段として、「私」の手記が書かれたのではないだろうか。先生と自己同一化した状態から一步距離を置き、自分自身を確立する試みが、先生への非常な近さを「当時の私」に何度も限定する手記の描き方だったのだと捉えられる。

また、一見すると、「こころ」は、先生の倫理体现の書であり、それを語り、後継する「私」の物語であるかのように見えるが、実際には、「私」の先生に対する批判が内在している。石原千秋(注21)や小森陽一(注22)は、先生が自決した友人をKという頭文字で呼んでいることについて、「私」がそれを「余所々々しい頭文字」(上・一)と書いているとして、先

生に対する一種の拒否を読み取っている。また、田中実(注23)は、奥さんをめぐる先生とKの三角関係を中心とした「悲劇」について、「奥さんは今でもそれを知らずにゐる」(上・一二)と「私」の手記に書かれていることから、「私」が手記を書いている時は奥さんが生きていたということを述べた。その上で、奥さんが存命であるにも関わらず、「私」が手記を書き、先生の遺書を公開する行為は、奥さんが生きていた限りは秘密を明かさないうでほしい(下・五六)と頼んだ先生へのある種の「裏切り」であると指摘している。

このように、一見、先生を全肯定し描かれているかに見える「私」の手記だが、先生への一種の批判を見出すこともできる。このことは、「私」が先生とすっかり自己同一化してしまっているのではなく、近すぎた先生から離れ、自己を確立しようとする「私」の姿として捉えられるのではないか。

「私」が手記を書くことは、同一化した先生と「私」を捉え直し、自分自身を生きていくための儀式だったと考えられる。「私」が先生と「私」自身の距離を離し、捉え直すためには、先生の絶対視をゆるがし、相対化する必要があった。そのためには、先生のメッセージに従い、生家直系のように遺書を継承するのではなく、対象を限定せず世間にその遺書を公開するしか方法がなかったのである。先生の死後も「私」は変わらず先生の弟子であった。そして、その「遺子」を継承した「子」でもあった。先生の遺志を受け継ぎ、同一化しながらも、自己の確立を試みようとする二律背反のあり方が、先生を肯定的に描きながらも世間へその遺書を公開することであった。先生との自己同一化と自己の確立の間で揺れながらも、「私」は自己確立を目指したのである。

ここで再度、先生の想定した遺書公開のあり方を思い起こしたい。先生の想定は前述した通り、自らが「私」に行了ったように、「私」もまた次の人間の「真面目」さをはかり、「真面目に人生そのものから生きた教訓を得たい」と考えている場合のみ先生の遺書を公開するという、先生と「私」の二人のあり方をなぞった、生家直系のごとき遺書

の継承である。そのような先生の想定に反して「私」が世間一般へ遺書を公開するのは、先生の相対化と、「私」の自己の確立という自分自身のための行為であったが、一方で先生の意向に沿った「真面目」さをはかるあり方を含んだ形式でもあったことを確認しておきたい。先生の遺書は長大であるが、上・中から成る「私」の手記もまた、先生の遺書に匹敵する分量である。そして「私」の手記の内容としては、先生との出会いからの回想であり、先生の過去は謎めいた状態のまま解き明かされることもなく、先生の過去を知るためには、最後に配置された先生の遺書まで読み進めなければならぬ。「私」の手記が世間へ開かれたものとしても、先生の遺書まで読み進めるまでに読者はある意味選別される。また、先生と「私」の血縁関係を彷彿とさせるような濃密な師弟関係を受け入れられる者でなければ、最後まで読み進めることはできないだろう。このようにして、「真面目に人生から教訓を得たい」と思うような、先生や「私」の考えに共感する読者だけが残るのである。その点において「私」の手記が先頭に、そして先生の遺書が最後に置かれることは、先生の意向に沿った、「真面目」さをはかる方法であると言えるのではないか。世間へ公開する以上、それは誰の目に触れるかわからず、望ましくない反応を得る可能性がある。しかし同時に、先生と「私」の非常に濃密な師弟関係を描いた長大な手記がはじめに置かれることにより、先生の遺書へたどり着くのは、基本的に「真面目」な読者のみが想定される。そのような構成に「私」の意を認めるなら、この公開のあり方は、あくまでも先生の遺志に沿おうとした、敬意に満ちたものでもあったのだ。

### おわりに

本稿においては、明治時代から大正期にかけて流行した修養の観点から、先生と「私」の関係、そして「私」が先生の遺書を世間に公開する意味について考察を行った。

Kの死後、先生は立身出世のための修養も、「人格」の完成を目指す「修養」も行う資格のない人物として自らを定位置していた。しかし、「真面目に人生そのものから教訓を得たい」と思う「私」の現れにより、「私」に遺書を託すことを決意する。そして生家直系のように遺書の継承を試みるあり方は、先生独自の〈修養〉であったと考えられる。先生独自の〈修養〉は、想定したあり方とは異なりながらも「私」による遺書公開によつてその一翼が担われた。それは、先生との自己同一化が甚だしかった「私」が、先生を相対化し自己を確立するための儀式であつた一方、先生の遺志に「私」なりに寄り添つた供養でもあつたのである。

注

- 1 「文芸と道徳」(明治四四「一九一二年八月一八日大阪市公会堂における講演。のち『朝日講演集』(朝日新聞社、同年十一月)に収録)、「私の個人主義」(大正三「一九一四年一月二五日学習院輔仁会における講演。のち『輔仁会雑誌』(大正四「一九一五年三月)に収録)など。
- 2 王成『行人』・『塵勞』論——〈修養〉の時代の文学として読む」(『立教大学日本文学』第七九卷、一九九八年一月)
- 3 藤井淳「夏目漱石『こころ』・百年の謎を解く(一)」(『駒沢大学仏教学部論集』第四五号、二〇一四年一〇月)
- 4 小森陽一『こころ』における同性愛と異性愛——「恋」と「罪悪」をめぐって——(小森陽一他編『総力討論漱石のこころ』翰林書房、一九九四年一月)
- 5 藤村操は、第一高等学校で英文学の講師として勤めていた漱石の教え子であつた。五月中旬のある日、授業で漱石に訳読を当てられた藤村は、妙に昂然とした態度で「やつて来ませんでした」と答えた。次の授業時にもう一度当てても藤村は下調べをしていなかった。漱石は癩癩を起こし、「勉強をしたくないなら、もう教室に出て来ないでもよい」と激しく叱責した。藤村が日光の華厳の滝に投身自殺したのは五月二二日のことである。藤村は大樹を削り「煩悶終に死を決するに至る」という言葉を遺した。藤村の死とその遺言は、五月二六日の『萬朝報』に報じられた。五月二六日、藤村のいたクラスに出講した漱石は、教壇に上るなり最前列の生徒に「君、藤村はどうして死んだのだい？」と尋ねたという。(江藤淳『漱石とその時代』第二部『新潮社、昭和四五年』二五二〜二五三頁)

- 6 参考 筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波現代文庫、二〇〇九年二月・筒井清忠『修養主義の説得戦略』『ソシオロジ』三六卷第二号、一九九一年一〇月）
- 7 石原千秋『漱石と三人の読者』（講談社現代新書、二〇〇四年一〇月）
- 8 参考 田中祐介「思考様式としての大正教養主義——唐木順三による阿部次郎批判の再検討を通じて——」『アジア文化研究』第三〇号、二〇〇四年三月）
- 9 戸松泉『「こころ」論へ向けて——「私」の「手記」の編集意図を探る——』『相模女子大学紀要』第五七号、一九九四年三月）
- 10 椎名健斗「知識人」漱石から「作家」漱石へ——「木曜会」にみる師弟関係の構造と変容——』『京都大学大学院教育学研究科紀要』第六号、二〇二〇年三月）
- 11 小宮豊隆『夏目漱石（下）』（岩波書店、一九三八年七月）
- 12 田中実『「こころ」という掛け橋』（『日本文学』第三五卷第二号、一九八六年二月）
- 13 押野武志「遺書」の手法——ペンとノイズ——（小森陽一・中村美春・宮川健郎編『総力討論 漱石の『こころ』』（翰林書房、一九九四年）
- 14 三浦泰生「漱石の『心』における一つの問題」『日本文学』第一三卷第五号、昭和三年九月）
- 15 瀬沼茂樹『夏目漱石』（東京大学出版会、一九六二年一月）二四四頁
- 16 相原和邦『漱石文学』（塙書房、一九八二年四月）一五五頁
- 17 梶木剛『夏目漱石論』（勁草書房、一九七六年六月）一六八頁
- 18 小森陽一「心」における反転する〈手記〉——空白と意味の生成——』『成城国文学』第一号、一九八五年三月）
- 19 小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第六号／特集『こころ』（翰林書房、一九九六年五月）収録、蓮實重彦・小森陽一・石原千秋鼎談「こころのかたち」における蓮實の発言。
- 20 13と同じ。
- 21 石原千秋『「こころ」のオイディプス——反転する語り——』『成城国文学』第一号、一九八五年三月）
- 22 小森陽一『「こころ」を生成する心臓』『成城国文学』第一号、一九八五年三月）
- 23 田中実『「こころ」という掛け橋』（『日本文学』第三五卷第二号、一九八六年二月）